

工学研究科修士論文概要書

令和5年度

学籍番号 22-ME207

専攻名	建設工学専攻	氏名	田中 颯太	指導 教員	西村 亮彦 印
コース名	まちづくり 環境コース				
研究課題	スマホ社会における歩行者の「目的」と「歩き方」の生成プロセスに関する研究				

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

近年、「歩行者中心のウォーカブルまちづくり」に関する取り組みが全国的に進められている。また、近年ではECサイトの普及や新型コロナウイルスの流行により、ネットを通じた購買行動が増えるとともに、スマートフォンの普及・発達で、まちなかにおける歩行者の歩き方や移動経路に影響を与えているものと考えられる。このことから、今後は「ウォーカブルなまちづくり」を実現する上で、スマホ社会において、歩行者の「目的」や「歩き方」がどう生成されるのかについて知見の蓄積が必要であると考えられる。

齊藤 1)など、都市における歩行者の回遊行動や回遊目的についての研究は少なくないが、都市の機能が、回遊目的や移動経路に与える影響について分析しているものは、高浜ら 2)など僅かに散見される程度である。また、スマホ利用が都市における人間行動のあり方に与える影響にまで言及しているものは見当たらない。

本研究は、スマホ社会におけるウォーカブルなまちづくりのあり方を検討する上で参考となる知見を得るため、スマホ利用が歩行者の来街目的や行動に与える影響について比較・分析を行うことを目的とする。

1.2 研究の方法

本研究では、実際の街で被験者に「スマホ利用有り」「スマホ利用無し」の二通りで街歩きを行なってもらう。本研究ではこの実験で得た情報を元に、①歩行者の「目的」と「歩き方」に関する全体的な傾向を把握した上で、②歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序、③歩行者の「目的の所在」と「移動経路」について、「目的のきっかけ」や「どのような意識で歩いているのか」に着目して分析を行うことで、④スマホ社会における歩行者の「目的」や「歩き方」の生成プロセスについて明らかにする。

2. 実験の方法と対象地

2.1 実験の方法

まち歩き中の「目的」や「歩き方」を記録するため、GPS ロガーを用いて移動経路を記録するとともに、

google フォームを用いて、街歩き中に発生した「目的」や「歩き方」に関する情報を取得する。さらに、実験後に被験者に対し、インタビューを行うことにより、より詳細かつ具体的な回遊行動について把握することとする。また、被験者に対し、まず初めに達成する目的である「第一目的」を設定する。本研究では、①カフェでの飲食、②お土産の購入、③食べ歩きの3つを第一目的として設定した。

2.2 実験の対象地

歩行者の「目的」や「歩き方」に与える「影響要因」がまちなかに多く点在する浅草を対象地とする。また、対象地区内では特に決まった範囲は設けない。

3. 歩行者の目的と歩き方に関する全体的傾向

スマホ利用無しに比べ、スマホ利用有りの場合、通りの先に目的を持ちながら歩く割合が増える人が多いことや、その通りに対して目的を持って歩く割合が減る人が多い傾向にあることが分かった(図-1)。

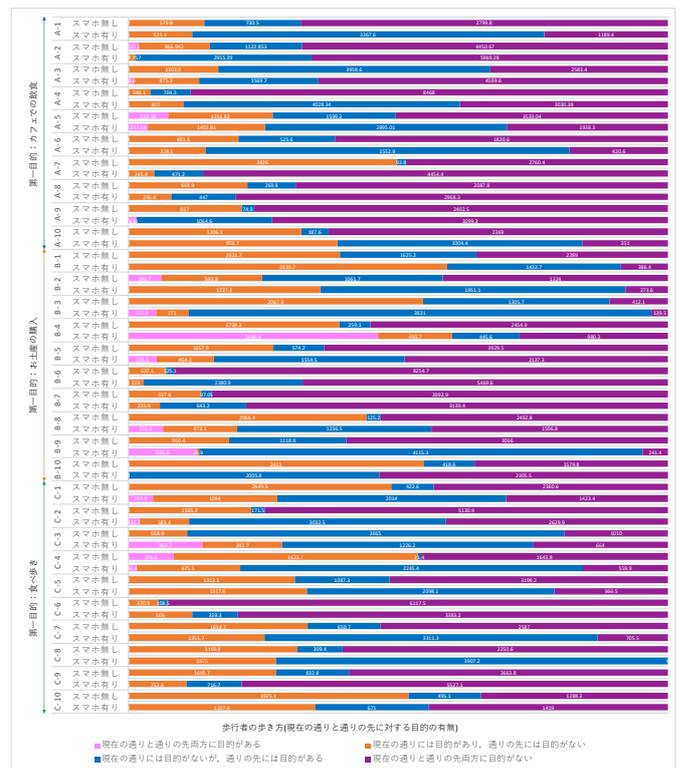


図-1 歩行者の通りや通りの先に対する目的の有無

4. 歩行者の目的と歩き方の生起順序に関して

歩行者の「歩き方」について、被験者間で共通の傾向が見られた。

①通りにも通りの先にも目的を持たない歩き方から通りの先に目的を持った歩き方が増えたケースでは、スマホ利用無しの場合に比べて、スマホ利用有りの場合に、通りにも通りの先にも目的を持たない歩き方が減り、通りの先に目的を持って歩くことが増えている(図-2)。

②通りに対する目的から、通りの先に対して目的を持つように変化するケースでは、スマホ利用無しの場合に比べて、スマホ利用有りの場合に、通りに目的を持って歩く機会が減り、通りの先に目的を持って歩くことが増えている(図-3)。

このように、スマホの有無により歩行者の「歩き方」が変化することが高く、スマホ利用によって、「目的地での体験の質」は向上するものと考えられる一方、歩行者によっては「歩行体験の質」が低下する場合があるということが分かった。

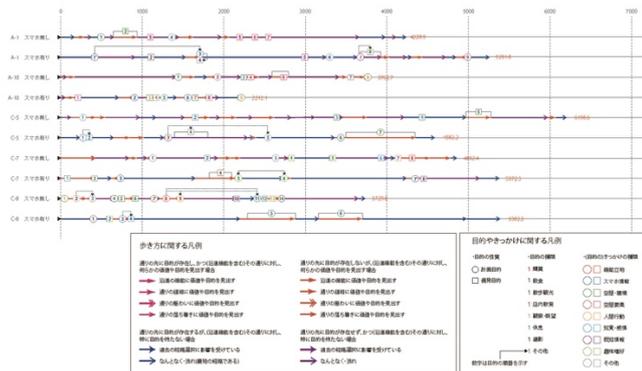


図-2 歩行者の目的と歩き方の生起順序(ケース①)

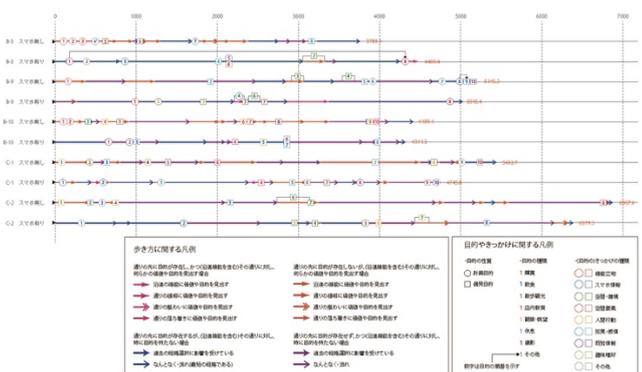


図-3 歩行者の目的と歩き方の生起順序(ケース②)

5. 歩行者の目的の所在と移動経路に関して

第一目的毎に歩行者の「移動経路」に関する特徴を把握した。第一目的がお土産の購入の被験者は、スマホ利用の有無を問わず、浅草中心部をメインに移動するが、何名かの被験者において、スマホ利用有りの場合、隅田川より東のエリアに移動範囲が広がる傾向が

あることが分かった。また、第一目的が「食べ歩き」の被験者の多くについて、スマホの有無を問わず全体を通して、浅草中心部をメインとした移動を行いながら、その前後で隅田川周辺も移動する機会が多いことが分かった。

また、同一エリア内における歩行者の「歩き方」については、多くの被験者が、スマホ利用がある場合、スマホ利用が無い場合に比べ、通りの機能や様相に価値を見出す機会が減った(図-4)。

	第一目的		
	カフェでの飲食	お土産の購入	食べ歩き
スマホ利用ありの場合、スマホ利用無しの場合に比べ	A-10		C-4,C-6,C-9
通りの様相に価値を見出す機会が増えた	A-10		C-4,C-6,C-9
通りの様相に価値を見出す機会が減った	A-5,A-8,A-1,A-7	B-2,B-3,B-7,B-8	C-1,C-5,C-7,C-8
通りの機能に価値を見出す機会が増えた	A-1,A-5	B-1,B-2	C-1,C-4,C-6,C-3,C-5,C-6
通りの機能に価値を見出す機会が減った	A-4,A-6,A-7,A-2	B-4,B-5,B-7,B-9	C-7,C-9,C-10

図-4 被験者の通りに対する目的意識の変化

このことから、歩行者はスマホを利用する場合、通りに見出す価値が変化する可能性が高いことが推測され、前章での分析において示唆された、スマホ利用に伴う「まち歩き体験」の質の低下が、同一のエリア内においても発生することが明らかとなった。

6. 結論

本研究の成果は以下の通りである。

- (1)歩行者の「目的」と「歩き方」に関する全体的な傾向
 - ・歩行者の「目的」、「目的のきっかけ」、「歩き方」について、その内容ごとに分類を行った上で、スマホ利用の有無両方の場合における、発生しやすい「目的」や「歩き方」について明らかにした。また、スマホ利用が直接的に影響を与える目的として、本研究では、「購買」「飲食」「散歩観光」「店内散策」の4つの目的がこれに該当した。
- (2)歩行者の「目的」と「歩き方」の生起順序に関して
 - ・第一目的毎に、「目的」と「歩き方」の生起順序に違いが生まれることが分かり、第一目的が、「目的」と「歩き方」の生起順序に大きな影響を生む可能性を示唆した。
 - ・スマホ利用によって、「目的地での体験の質」は向上するものの、「歩行体験の質」が低下する可能性があることが分かった。
- (3)歩行者の「目的の所在」と「移動経路」に関して
 - ・第一目的毎に、「目的」や「移動経路」に特徴があることが分かった。
 - ・同一のエリア内においても、スマホ利用によって、「目的地での体験の質」は向上するものの、「歩行体験の質」が低下する可能性があることが分かった

上記のことからエリアの魅力を高めることと、それを面的にPRすることの両方を充実させることが、今後の「ウォーカブルなまちづくり」では必要であり、これが上手くいかない場合、歩行者の歩行体験の質の低下に繋がりがかねないということを指摘し、結論とする。

参考文献

1. 齊藤参郎：都心空間における回遊行動の目的生起順序について、日本都市計画学会学術研究論文集、第28回/pp.55-60,1988
2. 高浜康亘、福井恒明：行動と意味から見た街歩き体験の分析、景観・デザイン研究講演集、No.7/pp.98-108,2011
3. 朴喜潤、佐藤滋：中心市街地における都市空間構成と歩行者回遊行動に関する研究：歩行者追跡調査結果と回遊単位概念を用いて、日本建築学会計画系論文集、71巻、605号/PP143-150,2006